



『千葉県の保護上重要な野生生物 — 千葉県レッドデータブック — 植物・菌類編2023年改訂版』が発行されました



RDB植物・菌類編2023の表紙と掲載された植物・菌類
 (1 シシラン、2 オトメフラスコモ、3 クロタマガヤツリ、4 ミズスギモドキ、5 ムラサキ、6 ハナゴケ、7 ナガエノスギタケ、
 8 ハクモウイノデ、9 表紙、10 シロオビテングタケ、11 キヨスミカワキノリ)

近いうちに絶滅のおそれがある生物種を、絶滅危惧種といいます。絶滅の危険性を評価して、絶滅危惧種をランク付けしたリストを、レッドリストと呼びます。そして、レッドリストに選定された生物種の特徴、分布、現在の状況や保護対策などをまとめて本にしたものが、レッドデータブックです。

CONTENTS

- 1 『千葉県の保護上重要な野生生物 — 千葉県レッドデータブック — 植物・菌類編2023年改訂版』が発行されました 1
- 2 ツヤハダゴマダラカミキリの特定外来生物への指定について 3
- 3 千葉県の外来種（オオオナモミ） 4

◎千葉県のレッドデータブックとレッドリスト

千葉県では、レッドデータブックとレッドリストをあわせた改訂と、レッドリストのみの改訂を、概ね5～8年間隔で交互に行っています（年表参照）。野生生物の状況は変化するため、レッドリストは定期的な再評価が必要です。まだ情報が不足する野生生物も多いため、研究が進むと絶滅危惧種がさらに増加すると想定されます。

1999年 (平成10年度)	レッドデータブック植物編の発行
2000年 (平成11年度)	レッドデータブック動物編の発行
2001年 (平成12年度)	普及版の発行
2003年 (平成14年度)	レッドリスト植物編(維管束植物)の改訂・発行
2004年 (平成15年度)	レッドリスト植物編の改訂・発行
2006年 (平成17年度)	レッドリスト動物編の改訂・発行
2009年 (平成20年度)	レッドデータブック植物・菌類編の改訂・発行
2011年 (平成22年度)	レッドデータブック動物編の調査、改訂・発行
2017年 (平成28年度)	レッドリスト植物・菌類編の改訂・発行
2019年 (平成30年度)	レッドリスト動物編の改訂・発行
2023年 (令和4年度)	レッドデータブック植物・菌類編の改訂・発行

年表 千葉県のレッドデータブック・リストの発行

千葉県レッドデータブックは、タイトルを「千葉県の保護上重要な野生生物」としています。これは、本書が県内に自生する生物種の現状をもれなく調査し、保護を必要としている種類を明らかにし、種ごとに保護対策を示すことを目的としているためです。

◎2017年版リストからの変更点： カテゴリーと判定基準

2017年版リストでは、平成10年度（1999年）に刊行された千葉県初のレッドデータブック「植物編」で示された、千葉県独自の判定基準（5項目の定量的要件と2項目の人為的影響の基準等）を用いていました。

2010年代になり、国際自然保護連合（IUCN）の基準が国内外で広く採用されるようになりました。そのため、今回はIUCNや環境省の基準に準拠しつつ、千葉県の現状に合うよう改変した新たな判定基準（標本や文献として明確に残された情報に基づい

た、生育地点数という定量的要件等）を選定に用い、より客観的な評価となりました。

◎千葉県の植物・菌類が減少している理由とは？

前回のレッドデータブック植物・菌類編2009年改訂版では79種が消息不明・絶滅とされていましたが、今回では93種と増加してしまいました。どうして、千葉県に生育する植物・菌類は減少しているのでしょうか。RDB植物・菌類編2023の情報を読み解くと、2つの側面から、①～⑥のような理由が見えてきました。

●側面1：生育環境の変化

- ①**開発による生育地破壊**：森林の伐採があると、種子植物やシダ植物だけでなく、樹木に着生する蘚苔類や地衣類、共生するきのこ類等も影響を受けます。護岸工事では湖沼、河川、岩礁、砂地等の環境が破壊され、種子植物や藻類が減少しています。湿地や草地在農地等に整備され、多くの種が乾燥化や、農薬、刈り込み等の影響により減少しています。
- ②**大気や水質の汚染**：地衣類は大気汚染の影響を受けやすく、湾岸地域の工業地帯化の影響を受けている可能性があります。また、印旛沼や手賀沼等の湖沼や、貧栄養の湧水地等に生育していた水生の種子植物や藻類は、水質汚染により減少しています。（例：表紙2 オトメフラスコモ）
- ③**人為的な環境の管理不足**：雑木林やマツ林等の人為的に管理されてきた森林や、ススキ草原等では、近年の管理不足で林床が荒廃するなどして、植物・菌類が減少しています。（例：表紙5 ムラサキ）
- ④**草食獣や外来種による被害**：ニホンジカ等の草食獣や、アメリカザリガニ等の水辺の植生を破壊する外来種の食害を受け、シダ植物や種子植物、藻類が減少しています。

●側面2：千葉県を分布の南限・北限とする種

- ⑤**寒冷期の遺存種**：寒冷期に、冷涼な気候で生育する植物が房総半島まで分布を広げました。このうち現在まで残っている遺存種（残存種）が、千葉県を分布の南限として、房総丘陵の自然林等に生育しています。これらは、地球温暖化により減少している可能性があります。（例：表紙8 ハクモウイノデ）
- ⑥**熱帯性の種**：熱帯性の植物・菌類の種が、千葉県南部を分布の北限として温暖で湿潤な渓谷等に生育していますが、森林伐採等による生育環境の乾燥化等により減少しています。（例：表紙4 ミズスギモドキ）

◎絶滅から復活した植物

絶滅したと考えられていたものの、今回の改訂で復活した種もいます。例えば、埋土種子から発芽して復活した種があげられます。(例：表紙3クロタマガヤツリ) 今後も、生育環境を改善することで、埋土種子等から復活する種があるかもしれません。また、専門家による調査の結果、再発見された種もあります。(例：表紙1シシラン)

◎調べ続けることの大切さ

千葉県は、西洋科学による高等教育が始まった東京に近いこともあり、明治期以降、植物調査がたびたび実施されてきました。今回は、戦前や1950年代の植物調査で記録され、その後も続けられた調査では発見できず、約50年間で経過して絶滅と判定されるケースがありました。これらより、高度経済成長期以降、県内に生育する植物・菌類は著しく減少したと推測されます。

このように、長期間にわたり調査が継続され、標本や文献資料が蓄積されてきたことで、千葉県の植物や菌類の遷り変わりが分かるのです。RDB植物・菌類編2023は、これまでの植物・菌類の専門家の調査研究の積み重ねの成果でもあります。

◎レッドデータブックを入手するには

RDB植物・菌類編2023は、生物多様性センターのウェブサイトから無料でpdfのダウンロードが可能です。冊子は、千葉県文書館で購入でき、送付販売もあります(2,800円、送料別)。詳細は、千葉県公文書館ウェブサイトをご覧ください。また、県内の公共図書館にも送付しています。

本書は、千葉県の植物・菌類を知る基礎資料であり、多くの方々に絶滅危惧種の存在や、絶滅のおそれがある理由を知っていただく役割があります。ぜひ、ご覧になってください。

(下稲葉 さやか 千葉県生物多様性センター)

ツヤハダゴマダラカミキリの特定外来生物への指定について

◎2種のカミキリムシの特定外来生物への指定

環境省では、かねてよりカミキリムシ科の2種(ツヤハダゴマダラカミキリ *Anoplophora glabripennis* 及びサビクロクワカミキリ *Apriona swainsoni*) について、その生態系及び農林水産業への被害等に鑑み、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」(以下、外来生物法)に基づき、特定外来生物として新たに追加すべく、具体的検討

を進めていました。

専門家会合からの意見聴取やパブリックコメントを経て、令和5年7月、これら2種を特定外来生物に指定するための「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律施行令の一部を改正する政令」が閣議決定されました。本政令は令和5年9月1日から施行され、これにより2種のカミキリムシは、飼養、輸入、譲渡し、放出等が禁止されることとなりました。

この2種のうち、ツヤハダゴマダラカミキリは、既に千葉県内でも発見されています。令和4年7月に野田市内で初めて確認されたその経緯については、生物多様性ちばニュースレターNo.76の巻頭においても紹介しています。



ツヤハダゴマダラカミキリ

◎どんな虫?

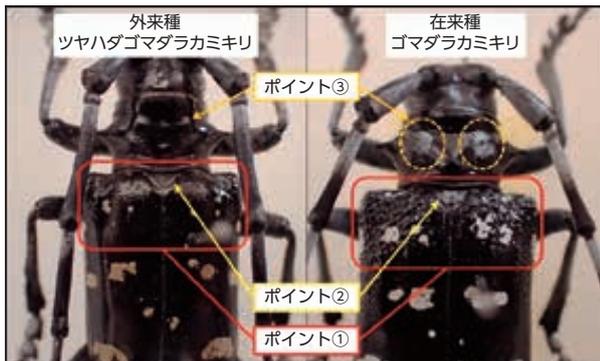
ツヤハダゴマダラカミキリは、中国・朝鮮半島原産で、アメリカ合衆国やオーストラリア、フランス、ドイツ、イタリア、ポーランド、スロバキアなどの国に移入分布しています。

冒頭に記した、「生態系及び農林水産業への被害」に関して、ツヤハダゴマダラカミキリによるものは、樹木への食害です。幼虫が秋から冬にかけて広葉樹の内側を食べ、トンネルを掘りながら成長するため、様々な果樹、あるいは街路樹に被害を与えるのです。このことから、ツヤハダゴマダラカミキリは、国際自然保護連合の定める「世界の侵略的外来種ワース

ト100」にも選ばれています。日本国内でも、既に北は宮城県から西は山口県まで、複数の県でその生息が確認されています。

◎見分け方と今後の対策

ツヤハダゴマダラカミキリは、郊外から都市部まで普通に生息している在来種のゴマダラカミキリと、とてもよく似ています。2～3.5cmほどの体長、黒地に白の斑紋がちりばめられていることなどいずれも共通していて、野外で瞬間的に見分けるのはなかなか困難です。しかし、よく見るといくつかの違いがあります。それが下の図です。



すなわち、

- ①ツヤハダゴマダラカミキリは、上翅の付け根に粒状の突起がない（ゴマダラカミキリには必ずこれがある）
- ②ツヤハダゴマダラカミキリは、上翅の付け根にある三角の部分に白い毛がない（ゴマダラカミキリにはこれがあることが多い）
- ③ツヤハダゴマダラカミキリは、首元に2つの白い紋がない（ゴマダラカミキリにはこれがあることが多いが、薄くなっている場合もある）

といった点です。

令和5年8月現在、千葉県内でのツヤハダゴマダラカミキリの確認は、上述の野田市の1例のみにとどまっていますが、周辺地域への侵入が進んでいる可能性もゼロではありません。新たに確認された場合、成虫の殺処分の他、被害木の薬剤処理や網掛けによる拡散防止、あるいは伐採などの対策が必要となります。もしも県内でツヤハダゴマダラカミキリと思われる昆虫に出会ったら、是非、生物多様性センターまでご連絡ください。

(大島 健夫/村井 貴幸 千葉県生物多様性センター)

千葉県の外来種

オオオナモミ



写真提供：生命のにざわい調査団a0452

オオオナモミ (*Xanthium orientale* subsp. *orientale*) は、北アメリカ原産で、耕作放棄地や河川敷など比較的栄養が豊富で開けた場所に生育するキク科の一年生草本です。国内では1929年に岡山県で初めて見つかリ、その後全国に拡大しました。在来の草本植物との競合や家畜などへの影響から、国の「生態系被害防止外来種リスト」では、その他の総合対策外来種、また「千葉県の外来生物リスト2020年改訂版」では、影響度B、緊急度Bとして掲載されています。

本種はいわゆる「くっつきむし（ひっつきむし）」と呼ばれる果実を持つ植物の1種です。みなさんも藪を歩いているうちに、いつの間にか植物の実が衣服にくっついてた、という経験をお持ちではないでしょうか。くっつきむしは、果実の表面にフックや逆さトゲ、粘液などを持っており、動物の毛や人間の衣服などにくっつくことで、種子を遠くへ運んでもらい分布拡大するという戦略をとっています。本種の場合は、果実の表面に生えているトゲの先端が少し曲がってフック状になっており、それによって動物の毛などに引っかかることができるようになっていきます（写真の赤丸内）。拡大してみると単純な構造ですが、このフック状の構造から着想を得たものが、私たちの身近なところでも使われています。それが、マジックテープ®の名称でおなじみの面ファスナーです。強力な接着力がありながらも、何度も着脱できる利便性から、現在では衣服などを中心に様々なところで使われています。このように、生き物の体型や機能などから着想を得て、ものづくりなどに活かす技術のことを生物模倣（バイオミメティクス）と呼んでいます。

在来種を駆逐したり、餌やすみかで競合したりと、日本国内ではやっかいな外来種たちですが、生存戦略や拡散方法などに着目してみると、意外とおもしろい一面が見られるかもしれません。

(村井 貴幸 千葉県生物多様性センター)



生物多様性ちばニュースレター No.79 令和5年9月30日発行

編集・発行 千葉県生物多様性センター（環境生活部自然保護課）

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2（千葉県立中央博物館内）

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

